

町医者だより

令和08年07月08月号

トランサミン

<発行・お問合せ先>

おおわだ内科呼吸器内科

院長 大和田 明彦

市川市南八幡4-7-13

シャポー本八幡2階

JR本八幡駅南口(シャポー改札口)

2分ミスタードーナツ並び

ヘアサロンAsh向かいビル2階

電話 047-379-6661

おおわだ
内科
呼吸器内科

トランサミンの一般名はトラネキサム酸ですがここではトランサミンという名称を使用します。日本では、その錠剤は全身性線溶亢進が関与すると考えられる出血傾向や鼻血や肺出血など局所線溶亢進が関与すると考えられる異常出血とそれ以外にも紅斑・腫脹・そう痒等の症状を有する扁桃炎、咽喉頭炎や口内炎における口内痛及び口内粘膜アフターや湿疹及びその類症、蕁麻疹、薬疹・中毒疹など多様な疾患に適応があります。用量はトラネキサム酸として、通常成人1日750~2,000mgを3~4回に分割経口投与するとされています。呼吸器内科では血痰の患者さんに処方することが多く「止血剤」という認識が強い薬剤です。開業前に週1回バイトで行っていた某商事会社の医務室で咽頭喉頭炎の社員の方に処方したところ何分か経って血相を変えて戻られました。先生、トランサミンって「止血剤」ですよ、血管の中で血が固まったら大変じゃないですか？もちろん咽頭喉頭炎によく処方されていることを説明して本人も納得いたしました。しかし、その時、そうは言ってもトランサミンは止血剤だよと改めて思い直しそれ日以来ほとんどトランサミンをのどの痛みを訴える患者さんに処方することはなくなりました。また、日本を含むアジアでは肝斑や美白など美容目的で服用されています。今回紹介する論文を見ると本当にトランサミンの安易な使用は大丈夫なのかと改めて思います。

2026年6月25日のニューイングランド医学雑誌(NEJM)に大きな心臓以外の手術に際してトランサミンを投与することで不用意な輸血を回避できるのではないかと報告がカナダから発表されました。手術開始時と終了時にそれぞれ1000mgのトランサミン(ここでは注射剤)を投与して4週間観察するというシンプルな研究です。その結果、2.5%と一見すると差は少ないですが有意差をもって輸血を減らすことができることが明らかになりました。また90日以内の静脈血栓塞栓症の発症リスクの上昇がないことも確認されました。同様の研究は過去にも行われていてPOISE-3試験(NEJM 2022年)も同様の結果でした。2023年にNEJMに発表された帝王切開後の輸血と死亡を減少させるかとの試験ではトランサミンの予防効果は認められなかったのですが、帝王切開の出血量はもともと多い可能性があり輸血は避けられなかったのかもしれない。雑誌の論説にもトランサミンの術中投与が手術の安全性を向上させることになると強調しています。

注目して頂きたいのはこれらの試験で使用されたトランサミンの量です(実際は注射ないし点滴で投与)。非心臓手術の二つの試験では術前術後に使用したのが合計2000mgで、帝王切開の試験では臍帯結紮後に1000mg、いずれも1日だけ使用しています。たったこれだけで少なくとも止血効果が1か月続きます。調べてみるとアメリカのFDAはトランサミンの内服薬の使用を生理経血が多い女性に限定して最大5日間の使用を認めているだけです。トランサミン含有外用液の使用はまだ許すとして内服薬の少なくとも長期服用は安全なんでしょうか。日本では美白・日焼け止めのための美容目的や湿疹の病名でトランサミン内服薬を長期処方している実態があります。それを認めているのなら厚生労働省やPMDA(独立行政法人医薬品医療機器総合機構)も血栓塞栓症のリスクの上昇が本当にか検証していく責任があるのではないのでしょうか